

教職大学院で何を獲得するのか？

—全国教職大学院学生意識調査より—

吉田 文（早稲田大学） ○河野 志穂（早稲田大学大学院）
 ○御手洗 明佳（早稲田大学大学院） ○松本 暢平（早稲田大学大学院）
 ○飯田 陸央（早稲田大学大学院）

1. 課題の設定と分析の方法

本発表は、教職大学院の学生がどのような能力を獲得しているかを明らかにすることを目的とする。専門職としての教員の養成を目的とする教職大学院であるが、学生はどのような能力を獲得しているのだろうか。また、どのような意識や行動が能力の獲得に寄与しているのだろうか。学生の能力獲得に関してはこれまで、大学生の学習成果を問う研究として学生の学習行動の把握とその規定要因を明らかにしようとする研究がおこなわれてきた（小方 2008,2011, 溝上 2009, 溝上・中間・山田[他] 2009 など）。そして、学習以外の大学生活の過ごし方が授業での知識・技能の獲得に効いているという結果（溝上 2007, 2009）や、社会あるいは他者との繋がりを多く含む正課外の経験が汎用的技能の獲得に影響するという結果（山田・森 2010）が示されている。だが、これらの研究は学部学生を対象とし汎用的能力の獲得を学習成果としている点で、われわれの目的とは方向を異にする。われわれが明らかにしたいのは、専門職として必要な能力の獲得が教職大学院においてどの程度可能なのか、学部新卒者と現職教員では能力の獲得度合いやそこに至る道筋に異同があるのかについてである。

的能力や汎用的能力の獲得に関連しているのか、b.大学院における学習行動が能力獲得に関連しているのか、c.意識と行動の相乗効果で能力獲得が促進されることはあるのかという3点であり、大学院進学までに異なる経験を重ねてきた学部新卒者と現職教員に分けて分析する。

分析に用いるデータは、全国の教職大学院在学者を対象に2012年11月～12月に実施したアンケート調査である（全25校中20校実施、配布数1397通、回収数534通、回収率38%）。質問紙では、教職に必要なとされる5領域26項目の能力（具体的には、「授業力」「学級運営や児童・生徒理解」「学校運営」「学校外との連携」「一般的な能力」）を問うたが、本発表では職業的能力として「授業力（具体的には、授業の専門知識／授業展開の技術）」と「学校経営力（具体的には、教員組織を統率する方法／若手教員の育成に関する知識）」をとりあげる。職業的能力をこの2つとしたのは、教職大学院が実践的指導力の育成とスクールリーダー養成を目的に掲げているためである。また、先行研究との関連を検討するため「汎用的能力（具体的には、社会全体が直面する様々な問題の理解）」も取り上げる。その他の変数に関しては、進学目的に関しては、積極性を表す変数として「指導を受けたい教員がいる」と「なんとなく自分の現状を変えたかった」を、教員個人のキャリアの志向性を表す変数として「教員の給与は能力給であるべきだ／年功給であるべきだ」を、教職全般に対する考え方に関する変数として、「教職は聖職か」をとりあげた。また、学習行動を表す変数は、自発的な学習に着目するため学習行動として「専門書を読む」「読書会や勉強会に参加する」「セミナーやシンポジウムに参加する」をとりあげた。

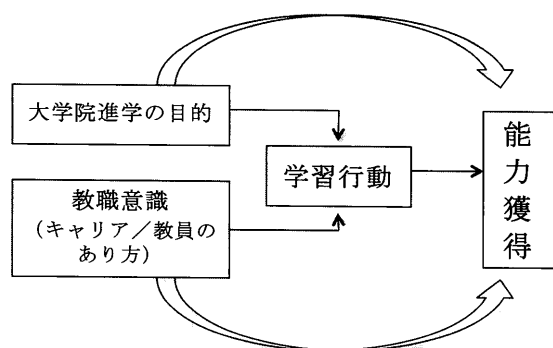


図1. 分析の枠組み

分析の枠組みは図1に示すように、a. 大学院進学目的と教職意識（教員個々人のキャリアや教職のあり方全般に関する考え方）が、職業

2. 学生はどのような能力を獲得したのか

(1) 大学院学生の全体傾向

学部新卒教員、現職教員、両者を含めた全体的な能力獲得の分布を確認すると、「授業力」や

「一般的能力」は身についたと答える学生が過半数を超えていた。他方、「学校経営力」では「身につけていない」と答える学生が過半数を越えていた。

(2) 学部新卒者と現職教員の比較

各能力の代表的能力について、学部新卒者（n=311）と現職教員（n=221）で分けたところ、両者で顕著な結果の差が出たのは「学校経営力」であった（図 2-1）。

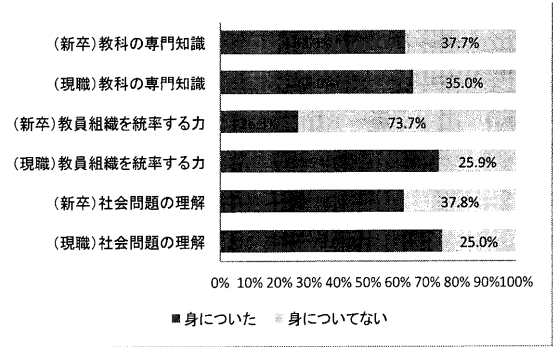


図 2-1. コース別、能力獲得の状況

現職教員では学校経営力のうち「教員組織を統率する方法」について「身についた」と答えた学生が 74.1%を越えているのに対し、学部新卒者では 26.3%だった ($p<.001$)。授業力や汎用的能力と比較して学校経営力は、教員経験のない学部新卒者には獲得しにくい能力であることが伺える。教職大学院において、学校経営に関する能力の育成は重要な目的だが、それは自己の能力として定着させるには一定の経験が必要なのかもしれない。

(御手洗 明佳)

3. 積極的な入学目的、学習行動と能力獲得

本節では、学部新卒者と現職教員で能力獲得の度合いが異なるという前節までの知見をふまえ、各群内でより能力を獲得するのはどのような学生なのかを明らかにするため、入学目的と在学中の学習行動が能力獲得に与える影響を分析する。

学部新卒者で入学目的と能力獲得の関連をみると、積極的な入学目的（以下、積極目的）を持つことで授業力、学校経営力、汎用的能力を獲得していた。入学目的と学習行動の関連をみると、積極目的を持つことで学習行動を多くおこなっていた。学習行動と能力獲得の関連をみると、学習行動を多くおこなうことで授業力、学校経営力、汎用的能力を獲得していた。

現職教員で入学目的と能力獲得の関連をみると、積極目的を持つことで授業力、学校経営力、汎用的な能力を獲得していた。入学目的と行動

の関連をみると、積極目的を持つことで学習行動を多くおこなっていた。学習行動と能力獲得の関連をみると、学習行動を多くおこなうことで学校経営力と汎用的能力を獲得していた。

さらに、目的あるいは学習行動がどのように能力獲得に関連するかを分析した（表 3-1 および 3-2）。学部新卒者の場合、積極目的を持ち学習行動を多くおこなう者が授業力をより獲得していた。現職教員の場合、積極目的を持ち学習行動を多くおこなう者が学校経営力、汎用的能力をより獲得していた。

表 3-1. 目的、行動と能力獲得の状況（学部新卒者）

		授業展開の技術		合計 (n)	p
		読書会への参加	身についた		
指導を受けたい	よくする	87.0	13.0	100.0(77)	*
	あまりしない	70.4	29.6	100.0(27)	
教員がいる	よくする	79.8	20.2	100.0(99)	*
	あまりしない	75.2	24.8	100.0(101)	

* $p<.05$

表 3-2. 目的、行動と能力獲得の状況（現職教員）

		教員組織を統率する力		合計 (n)	p
		読書会への参加	身についた		
指導を受けたい	よくする	86.0	14.0	100.0(43)	*
	あまりしない	60.0	40.0	100.0(20)	
教員がいる	よくする	75.4	24.6	100.0(65)	*
	あまりしない	70.1	29.9	100.0(87)	

* $p<.05$

以上の分析を通じ、学部新卒者、現職教員ともに積極的な入学目的を持つほうが能力を獲得しやすいことがわかった。また、学習行動を多くおこなうほうが能力を獲得しやすいことがわかった。積極目的を持つ者はより学習行動が増し能力獲得の度合いを高めるのではないかという観点からも分析したところ、積極目的を持ち学習行動を多くおこなう学生は、学習行動の少ない者よりいくらかの能力で獲得の度合いが高いことがわかった。そして、学部新卒者と現職教員の違いからは、積極目的を持ち、学習行動を在学中におこなったとしても、獲得した能力の種類は両者間で異なることを確認できた。教職大学院における学部新卒者と現職教員という 2 つのカテゴリは、実務経験の有無という立場の違いにとどまらず、獲得する能力の種類にも違いを生み出していると考えられる。

(松本 暢平)

4. 教職意識、学習行動と能力獲得

(1) 地位の志向性と能力獲得

教員として勤務する際にどのような処遇を望むかによって、能力獲得に違いはあるのだろうか。たとえば、処遇の一形態である給与に関して、個人の能力に応じた給与体系を志向する者は、年齢に対応した給与体系を志向する者よりも、自己研鑽の意識が高く能力獲得にも積極的なのではないか。教員という職業では、個々人に対する評価と給与の結びつきは必ずしも強くないが、キャリアに対する意識として上昇志向か安定志向かは、能力獲得に影響を及ぼすと思われる。本項では、教員の給与に関する考え方として、年功給を支持した者を「上昇志向」と名付け、能力給を支持する者を「安定志向」と名付けた。そして、こうした地位の志向性と大学院生活における学習行動および能力獲得の関係性を分析した。

地位の志向性について、学部新卒者と現職教員の分布を見たところ、両方で統計的な有意差はなかったものの、能力給と年功給を志向する者は両者ともに半々であった（学部新卒者のうち上昇志向は48.1%、現職教員のうち上昇志向は47.9%）。

2.(2)で述べたように、現職教員にくらべ、学部新卒者の学校経営力の獲得は低いが、表4-1に示すように、上昇志向の者は安定志向の者よりも多く獲得している。

表4-1-1. 学部新卒者 地位の志向性－学校経営力獲得 (%)

	身についた	身につかず	合計(n)	p
上昇志向	32.2	67.8	100.0(146)	*
安定志向	20.8	79.2	100.0(159)	

* $p<.05$

では、地位の志向性と学習行動、学習行動と能力獲得、さらにこれら3者（地位の志向性－学習行動－能力獲得）の関係はどうであろうか。

まず、地位の志向性と学習行動については、専門書を読む頻度が高いのは上昇志向の者である。週3～4日以上専門書を読むのは、上昇志向の者では56.1%であったが、安定志向の者では34.0%であった（ $p<.001$ ）。次に、学習行動と能力獲得については、専門書を読む頻度が高い者の方が学校経営力を獲得している。専門書を読む頻度が週に3～4日以上の方では、学校経営力を獲得したのは31.9%であったが、それ以下の頻度の者では21.9%であった（ $p<.1$ ）。最後に、地位の志向性と学習行動と能力獲得については、表4-1-2に示すように、上昇志向の者で10%水準で有意となり、専門書を読む頻度が高い者の方が読む頻度の低い者よりも、学校経営力を獲得していた。

表4-1-2. 学部新卒者 地位志向性－学習行動－能力獲得 (%)

	専門書 講読	学校経営力		合計(n)	p
		身についた	身につかず		
上昇志向	週3～4日以上	38.6	61.4	100.0(83)	†
	それ以下	23.8	76.2	100.0(63)	
安定志向	週3～4日以上	22.2	77.8	100.0(54)	
	それ以下	20.2	79.8	100.0(104)	

† $p<.1$

現職教員の場合も、地位の志向性と獲得に関連がある能力は、学校経営力である。表4-3に示すように、有意水準は10%と低いものの、上昇志向の者の方が安定志向の者よりも学校経営力を獲得している。

表4-1-3. 現職教員 地位の志向性－学校経営力獲得 (%)

	身についた	身につかず	合計(n)	p
上昇志向	79.6	20.4	100.0(103)	†
安定志向	69.0	31.0	100.0(113)	

† $p<.1$

しかしながら、現職教員の場合は、学部新卒者とは異なり、地位の志向性はいずれの学習行動とも関連性を持っておらず、またいずれの学習行動も学校経営力の獲得と関連していない。

学校経営力は、管理職になった際に必要性が増す能力であり、学部新卒者であれ現職教員であれ、上昇志向の強い者がこの能力を獲得しているということは想像に難くない。

学部新卒者の場合、学校経営力の獲得度は現職教員にくらべ高くないものの、上昇志向を持つことが学校経営力の獲得度の高さに直接つながっている。また、上昇志向を持つだけでなく、専門書を読むという学習行動を伴う者に関しては、更に学校経営力を獲得している。

他方、現職教員の場合は、教職大学院における学習行動に関わらず、上昇志向の者の方が安定志向の者よりも学校経営力を獲得している。

(河野 志穂)

(2) 聖職意識と能力獲得

本節は、教職に対する意識と在学中の行動が能力獲得に与える影響について分析する。本調査では教職に対する意識を20項目問うたが、そのなかから教職を総じてどのような職業ととらえているかを表していると考えられる専門職意識と聖職意識に着目した。専門職意識については教職大学院の制度から、教育プログラムは専門職としての教員を養成することを念頭に置いているが、学生も大半が教職を専門職と考え

ていた。聖職意識については全体 (N=534) の 43.8%、学部新卒者等 (N=310) の 37.1%、現職教員 (N=221) の 54.4%が教職を聖職と考えており、学部新卒者より現職教員の聖職意識が高かった。そこで、学生の聖職意識に焦点を絞り、聖職意識と在学中の行動が能力獲得に与える影響を分析する。

学部新卒者で聖職意識と能力獲得の関係をみると、聖職意識を持つことで汎用的能力を獲得していた。聖職意識と行動の関係をみると、聖職意識を持つことで学習行動を多くおこなっていた。

現職教員で聖職意識と能力獲得の関係をみると、聖職意識を持つことで授業力、学校経営力、汎用的能力を獲得していた。聖職意識と行動の関係をみると、聖職意識を持つことで学習行動を多くおこなっていた。

さらに、聖職意識と行動がどのように能力獲得に関連するかを分析した。学部新卒者の場合、聖職意識を持ち学習行動を多くおこなう者が授業力、学校経営力をより獲得していた。現職教員の場合、聖職意識を持ち学習行動を多くおこなう者が授業力、汎用的能力をより獲得していた。

以上のことから、教職大学院において、学生は聖職意識を持つことで学習行動に対するエンゲージメントが促され、それを持たない者より能力獲得の度合いが高いことがわかった。ただし、同じ「聖職」ということばでも年齢によってそれが指すものは異なると考えられる。それぞれの世代が持つ聖職意識を綿密に区分したうえで行動あるいは能力獲得との関係を分析する必要があるだろうが、それは今後の課題とした。なお、聖職意識と本調査で問うた 20 項目の意識の関係をみると、学部新卒者で 6 項目、現職教員で 10 項目と関連があった。そして、「教職は現行の 4 年間の養成で充分である」、「教員は高い社会的地位を得ている」、「教職は高度な採用試験がおこなわれている」の 3 つが学部新卒者と現職教員で共通していた。その全体的な特徴として、聖職意識は教職が現状ですでに高い社会的威信を持ち、それに就くには厳しい選抜が設定されていると考える者に持たれる意識であり、職務に対する自信と誇りを持つ者が能力獲得の度合いを高めていると考えられる。

(飯田 陸央)

5. まとめ

ここまでの分析をまとめれば、学部新卒者は職業的能力のうち「授業力」を獲得し、現職教員は「授業力」とともに「学校経営力」も獲得していた。学部新卒者と現職教員のいずれにお

いても能力をより多く獲得するのは積極的な入学目的を持ち、正課外での学習行動を多くする者であった。興味深いことは、学部新卒者も現職教員も、同様の進学目的をもち、同様の学習行動をとっていても、獲得する職業的能力が異なっているであった。また、全体傾向では、学校経営力を身につけにくかった学部新卒者のなかでも、個人のキャリアに関して上昇志向が高くさらに学習行動を多くおこなう者がそれを伸ばしている点は特徴的であった。さらに、教職を聖職とみなすか否かという規範意識と能力獲得との関連では、学部新卒者、現職教員ともに聖職意識を持ち、学習行動を多くおこなう者は職業的能力も汎用的能力も獲得する傾向がみられた。

おおむね正課外の学習行動は能力獲得に結び付いているが、それはどのような意識をもつかによって異なり、その意識も進学にあたっての明確な目的のみならず、自分の将来のキャリアをどのように展望しているかが、職業的能力の獲得に関連していた。専門職というキャリアをどのように展望できるのか、あるいはさせることができるか、こうした課題が示唆されているように思う。

6. 参考文献

- 溝上 慎一 (2009) 「『大学生生活の過ごし方』から見た学生の学びと成長の検討：正課・正課外のバランスのとれた活動が高い成長を示す」『京都大学高等教育研究』15, 107-118
- 溝上 慎一，中間 玲子，山田 剛史 [他] (2009) 「学習タイプ(授業・授業外学習)による知識・技能の獲得差違」『大学教育学会誌』31(1), 112-119
- 小方 直幸 (2008) 「学生のエンゲージメントと大学教育のアウトカム (特集 大学生論)」『高等教育研究』11, 45-64
- 小方 直幸 (2011) 「第 2 章 学生調査を用いた教育改善に向けた理論的フレームワークの構築」東北大学高等教育開発推進センター編『教育・学習過程の検証と大学教育改革』東北大学出版会, 47-62
- 山田 剛史，森 朋子 (2010) 「学生の視点から捉えた汎用的技能獲得における正課・正課外の役割」『日本教育工学会論文誌』34(1), 13-21

※ 本研究は、2012-2013 年度、早稲田大学教育総合研究所 B-10 研究部会の助成を受けて実施した研究成果の一部である。